日韓の現代宗教研究の課題

——新宗教の比較研究を中心に——

井上順孝

一、比較研究の条件

日本と韓国の現代宗教を比較の対象にすえると、多くの共通の研究視点を見出すことができる。マクロなレベルで見れば、両国とも近代化の過程で伝統的宗教の変容、ヨーロッパ諸国からのキリスト教の受容、新しい宗教運動の形成といった現象が、ほぼパラレルに生じている。こうした流れの中に現代宗教がどのような展開を示しているかを比較することは、非常に興味深いものである。

また、少し焦点を絞り、現代宗教研究の主要なテーマの一つである新宗教研究に話を限定しても、一九八〇年代あたりからの両国の研究の展開には類似点が多い。また一九九〇年代以降は、この分野における日韓両国の研究者相互の交流が増えてきており、これが研究視点の意識的共有という事態をもたらしつつある。(1) こうした現状認識の上に、本稿では現時点における日韓の現代宗教研究、とくに新宗教研究を中心とした比較研究の課題について考察する。

日韓両国の近代における宗教の展開は、近代化への応答という点では共通の枠のなかに置かれていた。しかしながら、伝統宗教が社会的にどのように位置付けられてきたかという点で、

かなり異なる様相を示していたので、実際の展開のありようには大きな相違が生じた。

日本の場合は、近世までに日本社会に定着していた主たる伝統宗教として、神社神道と仏教宗派があり、それに修験道を加えることができる。これに対し、韓国では儒教と仏教が中心となる。近代以前における日本の神社神道と韓国の儒教は、その社会的機能を比較した場合には、いくつかの違いがあるけれども、ともに明確な教団組織を確立するような形では展開しなかったという共通点がある。つまり組織宗教としてではなく、もっぱら宗教習俗あるいは社会的慣習として、それぞれの社会において継承されてきたとみなせる。

これに対し、同じく近代以前の社会において、両国ではっきりとした違いがあったのは、仏教の全体社会への組み入れられ方である。日本では江戸時代に檀家制度が確立されたことにより、その社会的な基盤はきわめて堅固なものとなった。少数の例外を除き、ほとんどの日本人は仏教宗派のどれかに所属することになった。これに対し、韓国では李朝時代には「崇儒排仏」という表現があるように、朱子学を重んじ、仏教を排斥した。歴代のほとんどの王はこの政策を踏襲した。僧尼は「賤民」の扱いさえ受けた。それゆえ仏教の信者は少数派となり、社会的影響も日本に比べてずっと小さいものにとどまった。近代以後、一九世紀末から浄土真宗を筆頭に、日本の各宗派が朝鮮半島で布教を開始し、その影響もあって、韓国の仏教の社会的地位は近代以降しだいに高まったとされる。しかし、二〇世紀にはいってからの日本統治時代（韓国でいう「日帝時代」）には、その活動は決して自由なものではなかった。一九一一年には寺刹令が発布され、朝鮮総督府の統制を強く受けることとなった。

つまり近代以前も以後も、韓国の仏教の基盤は日本に比べてずっと脆弱なものであった。この仏教の社会的機能の違いが、近代以降とくに戦後のキリスト教の展開において、両国に大きな違いをもたらした一つの原因であると考えられる。戦後韓国ではキリスト教信者が急速に増え、現在では人口の三割近くがキリスト教徒という統計が出ている。そのうちの約四分の三はプロテスタントである。これに対し日本ではキリスト教徒は人口の一％に満たない。この差についての説明は、戦後の両国の政治的社会的背景の相違が絡み、簡単にはできるものではないと考えられる。だが、日本には檀家制度という他の仏教国に見られない独自のシステムが確立していて、そのことがキリスト教の布教にとっては強い阻害要因となったという点は、もっとも重要な要因の一つにあげられる。

以上のことを含めて、近代化以降の日本及び韓国の宗教的展開の比較は多くの興味深い視点を提供する。伝統宗教が社会に組み入れられるあり方の違い、キリスト教の受け入れ方の違いといった問題も、今後の比較研究の重要なテーマになると思われるが、本稿では新しい宗教運動の展開過程の比較にとくに関心を寄せることにする。両国の新宗教の展開過程及び研究視点の比較は、これからの日本の新宗教研究に新しいパースペクティブを提供するに違いない。

日本の新宗教研究の草創期においては、新宗教を日本の近代化の中で生じた独特の現象として扱う研究や、ヨーロッパのセクト論、カルト論の脈絡の中で議論するものなどが主流であった。しかし、韓国との比較を本格的に進めるなら、伝統的宗教との関係、近代化との関係、さらに情報化やグローバル化の関係において新しい宗教運動の展開とその意義に、新たな光が当てられるであろう。同時にまた、日韓の比較から東アジアの比較をへて世界的比較へという新宗教研究の展開上、あってしかるべきであった試みが、日韓の研究者から本格的に着手される契機になりうる。

二、日本における新宗教研究の展開

日本における新宗教研究は、一九七〇年代後半からしだいに研究者の数を増し、視点も広がってきた。それは従来の研究視点を踏襲しつつ、新しい着眼もとりこんでいくものであった。そこでは同時に次のステップが少しずつ用意されていたとみなせる。国外の宗教運動との比較研究も、ひとまずそうした従来の新宗教研究の流れのなかで整理しておく必要がある。

新宗教を対象にした記述はすでに戦前からあったとはいえ、当時は一つの領域を形成するものではなかったし、研究の方法も確立されてはいなかった。なかには、新しく形成された宗教運動を最初から淫祠邪教あるいは類似宗教と決め付けて、蔑視する記述に終始するようなものも少なからずあった。戦後の研究ではそうした立場と一線を画するものがしだいに多くなったが、その中で一つの潮流を形成したのは、新宗教のなかで大きな社会的影響を与えていたものを民衆宗教として捉えていく視点であった。そこでの主たる対象は、幕末維新期から運動が展開しはじめた天理教、金光教などの新宗教であった。(2)

しかし、七〇年代以降の研究では、戦後に展開した新宗教がどんどん研究対象に取り入れられるようになり、調査・研究と

なる運動や教団の数が大幅に増えるとともに、研究視点も多様化することとなった。それまでは教祖研究とくにその教えや思想を扱う研究が中心的であったが、社会学的関心あるいは社会心理学的関心からの研究が増えていった。そうした主に七〇年代、八〇年代の研究の成果を示すのは、一九九〇年に刊行された『新宗教事典』である。(3)

しかしながら、一九八〇年代までの研究においては、新宗教を日本社会に生じた現象、あるいは日本に特有の運動として捉えるものが大半を占め、国外の同時期の多くの新宗教運動と比較していこうとする視点は、ともすればなおざりにされがちであった。

国外の宗教運動との比較は、自発的というよりは、欧米の宗教社会学のチャーチ・セクト論をはじめとする教団類型論、あるいは世俗化論といった議論の影響を大きく受ける形で始まった。つまり、世界各地で前世紀より展開してきた新しい宗教運動についての分析枠組み、その社会的影響の考察が、日本の新宗教研究にも適用されることで比較研究の視点が定着した。

しかし日本の新宗教の国外における布教の研究が少しずつ蓄積されると、欧米の宗教社会学的分析とは少し異なる視点から論じる試みが目立ってくる。欧米の宗教社会学は、新しい宗教運動にセクトとかカルトといった概念を適用することが多かった。そこでは暗黙のうちに、異端あるいは傍流といったニュアンスが込められることになりがちであった。しかし、日本ではそうしたニュアンスをもつ用語を避けるため、新宗教という用語によって、新しい宗教運動・教団を分析するというやり方が主流となった。その意味では、欧米の研究を参照しつつも、独自の展開をしたといえる。国外の運動との比較も、セクト、カルトの比較ではなく、新宗教運動の比較という視点が主流となっている。近年は欧米でもＮＲＭ（New Religious Movement）という概念で国際比較をする研究者が増えている。(4)

ところで、一九七〇年代後半以降、国外の新宗教の調査研究がしだいに蓄積していったが、こうした研究を促進する一つのきっかけとなったのは、一九七七～八一年に行われたハワイ及びカリフォルニアの日系人の宗教調査である。(5) その後、各地での実態調査が増え、研究者が目を向ける対象も、南北アメリカから東南アジア、ヨーロッパさらにアフリカへと広がってきている。九〇年代には、国外における日本の新宗教についてその展開過程や定着に関する要因などを広く比較するという視点もあらわれはじめた。(6) 韓国における日本の新宗教の展開についての研究も、そうした流れのなかに位置付けなければならない

が、まだ研究の蓄積はきわめて乏しい。[7] とはいえ、すでに戦前から各種のデータや報告書、研究がある。これからの研究にとって、それらの意義をあらためて検討し、研究史のうえにどう位置付けられるべきかを整理していく作業は今後も欠かせない。

三、韓国の宗教運動への関心

日本の新宗教の国外での活動の比較研究は、基本的には日本の新宗教の特徴の分析に主眼が置かれていた。[8] これに対し、近代に世界各地に起こった新しい宗教運動を比較するという土俵に参入するには、多くの国々で形成されている近代の新しい運動を研究対象とし、それを日本の新宗教と比較するという方法が、今後本格的に展開される必要がある。

一九世紀以来、新しい宗教運動が数多く生み出されたのはアメリカである。そのごく一部は、日本にも布教されている。末日聖徒イエス・キリスト教会（通称モルモン教）、エホバの証人（ものみの塔）、キリスト教科学（クリスチャン・サイエンス）、サイエントロジーなどがそうである。近代の新しい宗教運動の形成のされ方や時期などについては、日本の新宗教との比較研究をそそる点がいくつもある。[9] しかし、これまで日本の新宗教研究者がそれらをも比較考察の対象に取り込んでいる例は、まだ数少ない。また、アメリカ以外の地域における、土着の新宗教との比較研究も少ない。[10]

このような状況であるから、韓国における近代の新しい宗教運動との比較研究の蓄積が乏しいのは無理もないことである。しかし、韓国の近代の宗教運動への関心は、戦前から存在していたから、その意味では潜在的先行研究とでも言うべきものは、いくらか蓄積されている。また、韓国との比較は、日本と韓国との政治的、文化的関わりの深さゆえ、たとえばアメリカの事例との比較とは異なった比較の視点や材料を提供する。セクト論、カルト論といった従来の比較の枠組みとはまた別の視点も提起されるであろう。

朝鮮半島における新しい宗教運動への着眼自体は二〇世紀前半からあった。研究の視点や目的は、戦後の新宗教研究のものとは隔たるところが大きいが、資料・データの提供、当時の状況の概要を示しているという点で、今日の研究にとってもきわめて重要な意味をもつ。戦前に朝鮮半島で形成された数多くの宗教運動については、当時の朝鮮総督府が作成した『朝鮮の類似宗教』によって概要を知ることができる。これは治安上の理由もあって調査されたものであるが、それだけに現実的な観点

から緻密に現状が分析されている。ここで類似宗教と規定されているものは、大半が新宗教運動ととらえて差し支えない。同書によれば、一九三四（昭和九）年の時点で、朝鮮には教団の数が六七、教徒一七万人余、本部支部合わせた布教機関数一一五七とされている。もっとも信者が多かったのが天道教で、教徒数は九万人余。これら類似宗教教団の教徒総数の過半数を占めていると報告されている。[11]

ただ、第二次大戦からしばらくの時期は日韓関係が厳しい政治的環境の中にあったので、研究らしい研究は事実上不可能であった。一九七〇年代頃から、ようやくシャーマニズム研究など民俗宗教の調査が行われるようになったが、[12]韓国の新宗教についての研究は、それらに比べればかなり遅れた。民俗宗教の研究に比べて、教団宗教の研究は政治的なテーマとかかわる可能性が強くなるので、それも遅れの潜在的理由の一つとして推定できる。

一九九〇年代以降も教団宗教の研究はあまり蓄積されていない。東学等の戦前の民族宗教についての研究が着手されたが、戦後数多く形成された韓国の新宗教についての日本人による研究はまだ未着手に近い状態である。[13]

四、韓国における新宗教研究

韓国においては、近代以降の運動、とくに東学やその影響を受けた運動についての研究は、かなり蓄積されているようであるが、筆者にはそれらを整理し、分析する用意はまだできていない。ここでの紹介は、むしろ最近における韓国の「新宗教研究」の蓄積とその現状を一瞥することで、日本における研究の課題の検討の一助とするにとどまる。

韓国においては一九九〇年代に新宗教についての大部の報告書、研究書が相次いで刊行された。日本の新宗教研究の成果も取り入れており、それらの運動の思想の分析だけでなく、宗教社会学的な観点からの研究も出てきている。そうした韓国人研究者による研究の日本への紹介はまだあまり進んでいないが、各教団の基本的資料・データ類は整理が進んでおり、全体像がほぼつかめる段階に至っていることがうかがえる。日本の研究にとっても基礎的資料・データとなるものについて、いくつかを紹介しておく。

なお、韓国では日本で一応新宗教としてくくられているような団体を、新宗教（または新興宗教）と呼ぶ場合と民族宗教と呼ぶ場合がある。新宗教と民族宗教では指す対象が若干異なるよ

うにも感じられるが、むしろ対象を規定していく視点の違い、あるいは学派といったことが、大きく関係しているようである。この点は、韓国の学界においても今後議論が続くと考えられるので、ここではその差について細かく議論せず、新宗教ないし民族宗教と概括されている運動・団体についての研究の概要を示すにとどめる。

新宗教・民族宗教について全般的に触れた書や年鑑類の刊行は、一九九〇年以降目だっているので、まず、それらの主なものについて、構成やどのような団体・運動が対象となっているかの概要を示してみたい。

厳密な意味での研究書ではないが、一九九一年に刊行された卓明煥（タク・ミョンファン）『韓国新興宗教の実相』は、韓国の新宗教と韓国で布教を行っている外来の新宗教の概要を知るには役立つ。[11]

同書は三部構成になっている。第一部「民族宗教篇」では、韓国で発生した新宗教のうち、代表的なものが紹介されている。第二部「外来宗教篇」では、国外で発生した新宗教の中のいくつかが紹介されている。そして第三部「女性教祖列伝」では、韓国の新興宗教団体のうち、女性の教祖によって運営されているものを扱っている。

第一部では、大巡真理会、大倧教、天真教、円仏教、覚世道天地元理教、ハンオル教、霊主教、儒仏仙合一更定儒道の八教団が紹介されている。第二部では、外来の新宗教がやはり八教団あげられているが、そのうち半数は日本からのもので、天理教、善隣会（現在の教団名は善隣教）、世界救世教、創価学会である。日本以外の国からのものとしては、一貫道、バハーイ教、TM（超越的瞑想）、ラジニーシ教（運動）があげられている。第三部では、教祖と霊能祈祷師との中間形態にはいるのではないかと思われる人々が、二〇名余り紹介されている。

同書では韓国の新宗教の系統が一三に大別されている。すなわち、東学系、甑山系、正易系、仏教系、キリスト教系、儒教系、奉南教系、日本系、覚世道系、道教系、巫俗系、系統不明等である。

その中で最も韓国的な団体として、東学系と甑山系があげられている。崔済愚（チェ・チェウ。号水雲・一八二四～一八六四）が一八六〇年に創始した東学は、日本でも比較的知られている。崔は運動開始後ほどなく処刑されたが、その後、天道教、侍天教、上帝教など、彼の教えの影響を受けた宗教運動がいくつか生まれた。中でも一九〇五年に設立された天道教は、一時急速な教勢の展開を示した。天道教の創始者孫秉熙（ソン・ビョンヒ）は、

もともと東学の第三代教主であったが、彼の日本亡命中に、本国の東学のリーダーたちが、日露戦争に際して日本軍協力の姿勢を見せたので、別個に天道教を設立したとされている。

甑山教及びその系統の教団は東学系ほど日本では知られていないが、やはり重要な教団群を形成している。甑山教の教祖は姜一淳（カン・イルスン。号甑山。一八七一～一九〇九）で、甑山は、東学運動を目の当たりにし、東学に代わるような大道を創設しようと考えたという。各地で儒教、仏教、仙道にかかわることを学んだが、とくに金京訴から太乙呪を、金一夫より正易の理論を学んだことが大きいという。甑山の没後、後継者がばらばらとなり、数十の分派ができた。その中でもっとも規模が大きくなったのが大巡真理会である。

大巡真理会の創始者は趙鼎山（チョ・チョンサン。一八九五～一九五八）である。鼎山は一九二五年に自分の教えを無極大道教と称するようになった。彼の死後、同教は新派、旧派の二派に分かれたが、新派の朴韓京が設立したのが大巡真理会ということになる。この団体は現在ソウル市に本部を置き、高校、大学も設立している。

さて、一九九二年には二つの基本的資料・データを収めた書籍が刊行された。一つは韓国民族宗教協議会編『韓国民族宗教総覧』で、もう一つは柳炳徳他編『韓・日・中三国新宗教実態の比較研究』である。まず『韓国民族宗教総覧』は、タイトルで分かるように、近代に韓国で形成された新しい団体が民族宗教として包括されており、それらの概要が記されている。教団のカテゴリーを示したのちに、各教団を理事教団、会員教団、全体一般教団、その他に分けて、沿革、教義が説明されている。

系統としては、東学系、儒道系、檀君系、道教系、正易系、覚世系、ムルポブ教系、巫系、基督教系の九つに分けられている。

理事教団として、天道教、大倧教、円仏教、太極道、水雲教、甑山教、更定儒道、弥勒仏教、甑山法宗教が並んでいる。また会員教団としては、普天教、覚世道観、順天道、霊主教、花郎精神宣揚会、甑山真法会、覚世道天地原理教、檀君摩尼崇祖院が名を連ねる。これらが民族宗教協議会の中核的な教団とみなすことができよう。

全体一般教団は天尊教、仙道教、仙道、東学本部、正道教、天真教、三徳教、法相宗、人道教、冥府殿、金剛大道、東道法宗金剛道、覚世道南観、普化宗、弥勒宗、天地大安道、済和東大道、清道大享院、人仏道、ハンオル教、覚世道本源、大巡真理会、天上弥勒大道、地上天国建設院、甑山道、天皇宮、三神

教、信徒修道院、天宇教、救得道、道心精舎、世界宗教。

その他が統一教、世界一主平和国、勝利祭壇である。なお、それぞれのグループ内では教団設立順となっている。

同書ではまずこれの民族宗教の展開と概要に関する論文を収録し、その後各教団ごとの沿革、教義、儀礼、組織についての説明がなされている。したがって後半部分は教団事典としての機能を果たしている。

一方、円光大学校宗教問題研究所から刊行された『韓・日・中三国新宗教実態の比較研究』では、日本、韓国、中国の新宗教が比較考察されている。それによると、韓国には消滅したものまで含めると五百以上の新宗教があり、現在活動しているものは三百余であると述べられている。そして韓国の新宗教が次のように区分されている。

①既成宗教から分派した新宗教（儒教系、仏教系、キリスト系）

②韓国で創立された新宗教（檀君系、水雲系、一夫系、円仏教、ボンナム系、覚世道系、巫俗系、系統不明）

③外来の新宗教（日本系、中国系、その他）

このうち②の韓国で創立された新宗教のうち、宗教としての要件を備えたものとして次の五大類型を見出している。①水雲の天道教、②金一夫の正易思想に基づいた宗教、③甑山の甑山教、④羅哲の大倧教、⑤少太山の円仏教

これらは要するに、ある程度の体系だった教義をもち、社会的に影響が大きい教団とみなされている。とくに、一九二四年に朴重彬（パク・ジュンビン、号少太山）により設立された円仏教は、信者数や社会的活動の広範さからしてもっとも韓国社会で知られている新宗教である。[15] 円仏教は教育事業にも力をいれており、円光中学、高校、円光大学と中等・高等の教育機関を有している。この報告書自体も円仏教関連の研究所から刊行されており、研究活動もさかんである。

こうした韓国土着の新宗教・民族宗教の展開は一般にかなり複雑で、弟子たちの継承争い、一つの派から他の派への移動など、人間関係が込み入っていて、単純に整理するのは難しい。同書の記述に基づいて、東学系と甑山教系の主な系譜をまとめると次頁の図のようになる。

以上、ここで示した概説書によることで、韓国の新宗教の歴史的展開の概要は知ることができる。東学運動を一大契機としながら、数多くの宗教運動が展開しているが、その多くは分派・分立関係にあることも分かる。教えに注目すると、キリスト教系、仏教系、檀君系、儒教系、シャーマン系などの区分が

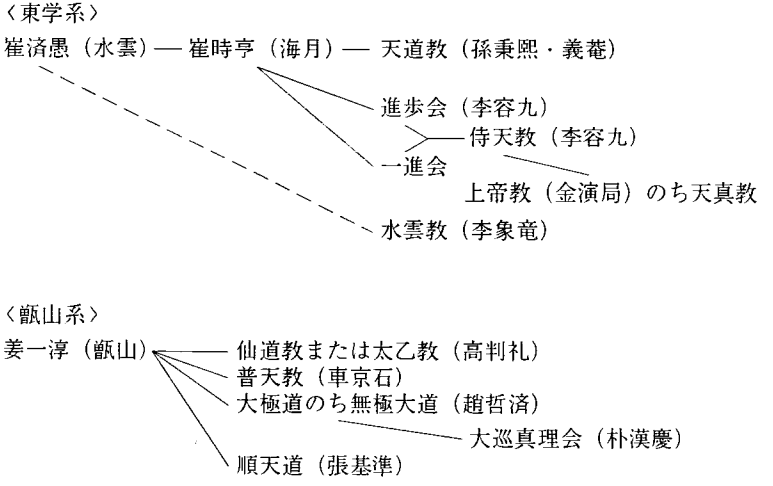

図　東学系と甑山系の概略

可能なようであるが、創始者が宗教家となっていく経緯には、それらを横断する形でいくつかのパターンを取り出すことも可能と思われる。また日本の新宗教研究における区分原理との比較が興味深いテーマとして存在する。

五、今後の研究の方向性

日本と韓国の新宗教研究は、それぞれ基礎的資料をそろえ、全体像を把握した状態にあると言える。両国の比較研究を展開するための基盤は一応築かれていると考えられる。そこで、隣国の新宗教に対する、双方のこれまでの関心のあり方を比較すると、次のような点が指摘できる。

①日本人研究者が韓国の新宗教研究や新宗教に対して抱く関心よりも、韓国人研究者が日本の新宗教研究や新宗教に対して抱く関心の方が大きかった。

②日本人の研究者が韓国語で韓国や日本の新宗教について論文を発表する例はほとんどないが、韓国人研究者が日本語で同様の発表をする例はいくつか見受けられる。

③研究対象は相互に比較的初期の新宗教、すなわち一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて展開した運動についての研究が中心的である。つまり相互にある程度その国で評価の

定まった教団を研究対象にすることが多いということである。

①と②の背景には、基本的にこの分野では、日本語文献を読める韓国人研究者の方が、韓国語文献を読める日本人研究者よりも多い、という現状が反映している。また③については、戦後に教勢を伸ばしたような教団を対象とした研究は、いずれの側もまだ未着手というに近いということを示している。日本人研究者による韓国の新宗教研究を見ると、対象となったのは、東学及びその直接的影響を受けた教団のものが若干みられる程度である。[16] 公称で約百万人の信者を有するとされる円仏教についても、まだほとんど研究らしい研究がない。

戦後に展開した教団の中では統一教会（世界統一神霊協会）に関するものがごく少数あるが、これは韓国の新宗教として研究するというより、日本における統一教会、原理運動に対する批判的研究の延長として、教祖の文鮮明の研究、教義の分析等が行われたというのが実情に近い。したがって、日本での統一教会の扱われ方を反映して、学術研究よりも批判書の類がほとんどである。[17]

韓国人による日本の新宗教の研究も、天理教や金光教といった幕末維新期に展開した新宗教についての研究が主体である。最大の新宗教である創価学会についても、量的には少ない。[18] 日本における研究の蓄積に依拠せざるをえないという研究上の理由とともに、これらの教団は戦前韓国で布教活動を行っており、天理教は現在でも分教会が存在するという韓国における歴史的経緯とも関係していると考えられる。

以上のような研究状況に基づき、最後に現在求められる課題について考察する。一つは従来の交渉史へのより多面的アプローチであり、もう一つは現在の状況への認識と新たな研究方法の構築である。

第一の点は日韓両国におけるこれまでの新宗教の交流についての研究が、天理教など一部の教団に偏っていたのを、もう少し広げることで、交流の歴史についてより掘り下げていくことである。たとえば、福岡県に本部を置く善隣教の場合、教祖力久辰斎の父力久辰三郎が神道教派の一つである実行教に所属する神道実行教力久教会を一九〇二年に設立している。二六年の父の死後教会を継承した辰斎は、朝鮮半島に渡り北漢山の洞窟で修行をしたとされている。帰国後も厳しい修行が続くが、朝鮮半島における体験がその後の活動にどのような影響を与えたかといった関心もわく。[19]

天理教や金光教以外の神道教派でも、戦前に朝鮮半島におい

て布教を行った例があるが、それらについての研究はきわめて乏しい。[20] また大本は一九二四年に朝鮮布教を開始し、大本の分派である生長の家の教祖谷口雅春も第二次大戦中の一九四二、四三年の二回、朝鮮半島に宣教に行っている。[21] その効果がどれほどあるか分からないが、生長の家の影響を受けた教団が現在韓国にある。[22] これら戦前からの影響、そしてそれが戦後の断絶期を経て今日どのような状況にあるかという問題がある。

一方、韓国の新宗教が日本の教団に与えた歴史的影響については、今のところほとんど認められていない。ただ在日韓国人・朝鮮人を対象にした研究が進めば、あるいは思いがけない影響関係が見出されるかもしれない。[23]

これら第一の点については、資料的制約があるし、今後もなかなか詳細な研究は困難が予想される。それに対し、第二の現在の状況に関する研究に関しては、将来的にさまざまな可能性が存在する。同じような視点から比較できるものも増えると考えられる。なぜなら、一九八〇年代後半からは、両国に起こっている宗教現象がリアルタイムで把握しうる状況が整ってきたうえに、両国で現象としてパラレルに起こる、あるいは似たような現象が起こっている事実があるからである。

パラレルに生じている現象の一つに、いわゆる「カルト」問題と「サイビ宗教」問題があげられる。一九九〇年代以降、日本ではオウム真理教事件、法の華三法行事件、ライフスペース事件など、宗教団体あるいはそうと理解されるような団体が社会的な警戒をもたらすという現象がいくつかある。これらを新宗教に含めるかどうかについては、今後検討すべき課題の一つであるが、[24] 少なくとも新宗教の周辺で起こっている現象というふうには理解できる。これらの団体も活動や組織形態などいくつかの面で、従来の新宗教の影響をかなり受けているからである。

そしてこれと比較しうるような現象が一九九〇年前後から韓国でも起こっている。日本の新聞・雑誌等でも紹介されたものをいくつか列挙してみる。[25] まず、一九八七年八月には朴順子（パク・スンジャ、一九三九年生）という女性教祖以下三二名が、ソウル近郊の竜仁で集団自殺した「五大洋事件」がある。男性四人を含む三二名が狭い屋根裏部屋に折り重なるように死んでいたため、韓国では一九七八年のガイアナの人民寺院事件を連想させるものとして衝撃をもって迎えられた。

日本ではその前年の一一月に、和歌山県で女性七人が教祖の後追い自殺をするという事件（「真理の友教会事件」）があった。それが海岸で灯油をかぶって焼身自殺するというものであったた

め、この事件との連想で報道された記事が見られる。

八九年七月には、光州の山中に数十名の信者が集団家出するという事件が起こった。大半は女性信者であった。教祖は全末仁（チョン・マルイム）で、もと大巡真理会の信者であったが、破門されてから晴雨一神会と呼ばれる団体を作った。彼はその年の八月八日に終末が来ると主張していた。この事件は日本では「イエスの方舟」事件の韓国版という形で報道されたりした。

こうした団体は韓国社会では「似而非（サイビ）宗教」つまりエセ宗教と呼ばれるが、これは日本的なコンテキストでは「カルト宗教」というニュアンスに近いと考えられる。

宗教団体が関わる社会的事件はサイビ宗教と呼ばれるものに限らず、キリスト教会に属する団体においても起こっている。八〇年代末に終末論を唱える教会が少なくなく、もっとも多い九二年一〇月説を唱える教会・団体だけで約二五〇あったとされる。なかでも一〇月二八日午前零時にイエスが再臨し終末が来る、と説いたタミ宣教会は、その後信者たちがだまされたと騒ぎ、李長林（イ・チャンリム）牧師が詐欺の疑いで逮捕されるという事件にまでになった。これも日本において報道された。[26]

またごく最近の例では、天尊会事件がある。天尊会は牟幸龍（モ・ヘンリョン）・朴貴達（パク・クィダル）夫妻によって一九八四年に創始され、一時は三百以上の修練道場をもつほどに急速に規模が拡大し、若者の信者が多いことで注目された。オウム真理教と同じような時期の展開である。一九九九年には真言宗に属する岡山県の一寺院と正式に交流を開始するなど、日本への布教や日本の宗教界との交流に着手していたが、二〇〇〇年一月に牟以下幹部が詐欺容疑で逮捕された。[27]

これは牟らが次のように運動を展開したからとされている。すなわち一九九四年から「世界最後の日が間もなく来る」と宣伝し、「私は神の意思を得ており、世界最後の日が来る前に、必ず聖殿を建造しなければならない」と公言するようになった。信者らには家を売り、金を借りて、聖殿を建てるための資金を調達するなどを求めた。そのようにして得た約一千億ウォン（おおよそ百億円）の寄付金を独占し、自分のものとしたという容疑である。また、「旧暦二〇〇〇年一月一五日は地球の最後の日であり、気功を修練する弟子のみが永遠に生き続ける」と説き、特別な儀礼を行う予定であったが、その直前に逮捕された。[28]

このように、両国でほぼ同時期に、宗教をめぐる似たような社会問題が続発しているということは、両国の宗教を包む社会的背景に類似した要素があることを推測させる。さらには、これが世界的傾向と連動しているのではないか、という発想をも

たらす。カルト問題以外にも、サイバー宗教問題など、日韓の比較においても、当初からグローバルな視点が必要とされるものが増えると考えられる。

六、むすびに代えて

以上述べた第一、第二の点に関わる研究、とくに第二の点に関わる研究の遂行には、日韓の研究者の交流をさらに深めることが求められる。一九九〇年代から、新宗教研究者の間にも、プロジェクト単位、あるいは学会レベルの交流が始まっており、[29] これからの研究の形態においては、共同調査の比重が増してくると考えられる。

なお、最後に一言付け加えるなら、本稿では日本語もしくは韓国語で発表された研究を対象として議論を展開させたが、英語その他の欧文文献や、中国語の文献まで視野に入れれば、若干異なった評価が生まれたかもしれない。むろん、両国の新宗教に関する相互研究の展開においては、日本語もしくは韓国語で発表された研究がベースになってきたわけであり、そこでの研究成果は他の言語での研究成果を基本的に規定してきたと考えて差し支えあるまい。

ただし、これからの研究においては、よりグローバルな視点から日韓の宗教運動をみていくことが必要になってくる。その場合には、むしろ英語での公表を主たる議論の展開の場に求めるということも、日韓双方にとって一つの選択肢として差し出されている。

さらにまた、すでにその兆候がきざしている宗教団体によるインターネット上の情報の利用を前提とするなど、同時代的な現象を捉えるための新しい研究方法を、より積極的に用いざるを得ない段階になっている。その場合の媒介言語として、グローバルな議論をもっとも展開しやすい英語の比重がやはり増してくるということが予測される。新宗教あるいはそれに関連する日韓の基礎データや資料を相互に翻訳すると同時に英語で共有するという意識的な試みも必要となろう。

日韓の新宗教の研究をさらに広範に展開させていくためには、相互の社会において起きている現象に、より強い関心を抱くとともに、研究遂行上に生じているこうした条件を考慮しておくこともまた、欠かすことができない。

註

（1）その代表的な成果として柳炳徳他編『宗教から東アジアの近代を問う—日韓の対話を通して』ペリカン社、二〇〇二年、があげられ

る。この書は、一九九三年以来、数度にわたって日韓の研究者が合同で行った研究会、シンポジウム等の成果の一端を示すものである。

(2) この立場の代表は村上重良らによる研究である。初期のものとして、村上重良『近代民衆宗教史の研究』法蔵館、一九五八年、がある。

(3) 井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編、弘文堂。なお同書の資料篇が増補されて別個に刊行されたのが、同編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、一九九六年、である。

(4) 日本の新宗教については欧米でもNew Religionあるいは New Religious Movementと記述するのが普通になってきており、代表的な次の二つの欧文文献目録もそのようになっている。Earhart, H. B., The New Religions of Japan: A Bibliography of Western-Language Materials, Monumenta Nipponica, 1970. Clarke, P. B., Japanese New Religious Movements, Japan Library, 1999.
また日本に限らず世界の新宗教運動をNRMとして把握する例も多い。たとえば、Wilson, B. and Cresswell, J. eds., New Religious Movements: Challenge and Response, Routeledge, 1999.

(5) 柳川啓一を代表者とする三度にわたる共同調査であるが、これについては、拙著『海を渡った日本宗教』弘文堂、一九八五年、中牧弘允『新世界の日本宗教』平凡社、一九八六年、を参照。

(6) 島薗進『現代救済宗教論』青弓社、一九九二年、はそうした視点からの研究の一つである。

(7) この点については、井上順孝「グローバル化のプロセスからみた新宗教」(脇本平也・田丸徳善編『アジアの宗教と精神文化』新曜社、一九九七年、所収)を参照のこと。

(8) このような視点からの最近のまとまった研究としては、ブラジルにおける日系新宗教について比較考察した渡辺雅子『ブラジル日系新宗教の展開』東信堂、二〇〇一年、がある。

(9) この点については、拙著『若者と現代宗教』ちくま新書、一九九九年、の第三章「グローバル化する世界とハイパー宗教」において、簡単に見通しを述べた。

(10) ここではたとえばカーゴカルトについての研究など、人類学者による土着の宗教についての研究は省いてある。あくまで日本の新宗教研究の延長として、国外の新宗教運動を研究する例がどれほどあるかという視点からの評価である。

(11) 同書には主な宗教の概要、信者数、教祖の顔写真など、きわめて貴重な資料・データが収録されている。ここでいう「類似宗教」が起こった理由としては、「此処に朝鮮の伝統を内容とし、共通社会感情を刺戟し、現実生活に対する不満嫌忌を解脱し、楽しき生活へのあこがれを満すべしと説く宗教あらば、たとへそれ等の提言が空想的なものにせよ、満たされざる生活上の悩みを除去し過渡的社会感情を慰藉するものとして、歓迎せられるであらう」(同書、一七頁。漢字は新字体に改めてある)とされている。基本的に記述の姿勢は批判的であるが、資料・データ自体は今日の研究にとっても参照すべきものである。

(12) この動向についての手際よい紹介として、Abito Itoh "Japanese Research on Korea." *Japanese Review of Cultural Anthropology vol. 2.* 2001. 2001. がある。

(13) 宗教研究における東学その他の民族宗教の研究の動向については、川瀬貴也「「国家」観と「近代文明」観—天道教幹部「民族代表」について」(『東京大学宗教学年報』一四、東京大学宗教学研究室、一九九七年、所収)、同「東学とその教え—千年王国論によせて」(『宗教研究』三一八、日本宗教学会、一九九八年、所収)など

を参照。

（14）この書は日本では翻訳されていないが、真鍋祐子氏が国学院大学日本文化研究所の兼任講師であったときに、氏の申し出により同書の素訳を依頼した。ここではそれに基づいて内容を紹介している。真鍋氏には感謝の意を表したい。

（15）本部は全羅北道裡里（イリ）市に置かれている。

（16）丹羽泉「韓国鶏龍山新都内周辺の新宗教教団の現状について」（『青丘学術論集第八集』韓国文化研究振興財団、一九九六年、所収）、同「韓国鶏龍山新都内地域における新宗教教団について—正道教総本部の事例を通して」（『西日本宗教学雑誌16』一九九四年、所収）は、数少ないそうした研究の例である。また、渕上恭子による祈祷院についての研究「「祈祷院」にみる民族史と民俗宗教—韓国キリスト教のフロンティア」（『宗教研究』二九六、一九九三年、所収）があるが、祈祷院の一部は新宗教的な機能を果たしているので、こうした視点からの研究も広い意味での新宗教研究に含めるべきかもしれない。

（17）韓国宗教の日本への進出は統一教会以外は、まだそれほど知られていないが、統一教会の分派的存在であるMS教も、日本で布教活動をしている。教祖の鄭明析（チョン・ミョンスク、一九四五〜）は一時期統一教会の信者であったとされる。なお、教団名のMSは「モーニングスター」の意とされるが、教祖の名前（Myong Suk）から来ているともいう。日本へは一九八五年頃布教を開始したとされている。現在は「摂理」と称している。

（18）天理教を扱ったものとして、李元範「日露戦後の宗教政策と天理教—『三教会同』政策をめぐって」（『宗教研究』二九四、一九九二年、所収）、同「近代日韓関係と天理教運動」（柳炳徳他編、前掲書、所収）、朴奎泰『幕末期における救済思想の研究』（一九九五年、学位論文）など参照。李は、日韓の新宗教の比較研究を韓国側で推進している一人である。また趙誠倫「日本における新宗教のアジア布教と民族問題」（久一昌三監修『日韓文化交流基金訪日学術研究者論文集—アカデミック—第八巻』、日韓文化交流基金、二〇〇〇年、所収）では、天理教と創価学会の韓国での布教状況について、簡単に触れられている。

（19）小山章『教祖伝上巻』宗教法人善隣会、一九七六年、を参照。

（20）神道教派では神道修成派が一八八五年に釜山布教、神理教が一八九七年に同じく釜山布教したことが知られているが、その詳細についての研究はない。

（21）生長の家本部編『生長の家五十年史』日本教文社、一九七五年、を参照。

（22）ソウル、釜山等に教会をもつ光明会は、生長の家の影響で戦後創設されたが、こうした教会の存在が戦前の生長の家の活動とどう関係があるかといったことも今後の課題の一つである。

（23）戦前、日本に在住した朝鮮人に関しては、内務省警保局が調査をしており、彼らの間での母国の新宗教・民族宗教がどの程度信仰されていたかがある程度分かる。それを見ると、天道教の日本における活動などはもう少し注目されていいと感じられる。なお、戦後の状況に関しては、たとえば宗教社会学の会が在日韓国人・朝鮮人の日本における宗教生活についての調査を行っており、生駒山系に存在する六〇余の朝鮮寺の大半を対象とし、クッなどいわゆるシャーマニズムの日本における展開を調査している。こうしたシャーマニズム研究の動向も新宗教研究においておさえておく必要がある。宗教社会学の会編『生駒の神々—現代都市社会の民俗宗教』創元社、一九八五年、参照。

（24）筆者は、新宗教とは区別される運動も出現していると考え、それ

らの一部をハイパー宗教という概念で理解できないかということを提起した。これについては拙著『若者と現代宗教』（前掲）を参照のこと。

(25) 五大洋事件以下、韓国における事件の日本における報道に関しては、宗教情報リサーチセンター（RIRC）が提供している「宗教記事インデックス・データベース」を検索することで得られた記事に基づいている。

(26) その他、日本で報じられたものに、一九九六年に京畿道で信者の死亡事件を起こした永生教（教祖は曾熙星ソ・ヒソン）の事件がある。

(27) この事件の背景については、渕上恭子「韓国「似而非宗教」事情—天尊会の教団犯罪をめぐって」（『国際宗教研究所ニュースレター』三〇、国際宗教研究所、二〇〇一年、所収）でも簡単に紹されている。

(28) なお、この天尊会や、注記したMS教については日本では本格的研究はなく、報道もわずかである。しかし、インターネットで検索すると、中国語によるこれらの事件の報道がいくつかみられる。最近、中国においては近隣諸国のこうした事件に急速に関心を寄せ始めたことがうかがえる。あるいは法輪功の事件が関係しているかもしれない。

(29) たとえば前述の日韓交流や、一九九九年と二〇〇〇年に行われた「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトの合同調査、二〇〇二年に発足した「宗教と社会」学会・日韓宗教情報データベースプロジェクトなどが挙げられる。